

今回の旅の2日目、2017年の5月11日(木)である。鞍山にある中国・東北地方四大名山の一つ「千山」に登る日が来た。四大名山については、'わんりい' 第222号(2017年4月号)に書いたが、改めて筆者との関わりを紹介すると以下の通りである。

- ①長白山2,691m(吉林省・北朝鮮との国境、2008年登山)
- ②鳳凰山836m(遼寧省・丹東市郊外、2016年登山)
- ③医巫閭山866m(遼寧省・錦州市、未登頂)
- ④千山(主峰=仙人台)708m(遼寧省・鞍山市、2017年登山)

今回で③を除いてすべて頂上に立ったことになる。①の高さはかなりなものであるが、頂上近くまで道路が整備されており、登山というほどのものではない。皆頂上の美しい火口湖を見に行くのである。勿論麓から登る人もいるが、時間を有効に使うとすれば安直に行くしかない。昨年は結構険しい鳳凰山に登ったが途中までロープウェイがあるのでさほど大変ではなかった。しかし千山は一切文明の利器はなくてただ目の前の石段を一つ一つ登るので大変疲れた。来年か再来年には③に登って一区切りを付けたいと思っている。ちなみに中国の山は、泰山、北京郊外の盤山などで文明の利器を一部使ってはいるが10座近く頂上に立つことができた。

千山の謂れは、999の峰からなる山々の総称でほぼ千あるので「千山」と命名したという。それにしても根気よく数えたものである。古くは「積翠山」と呼ばれた。主峰は708mの「仙人台」である。千山の

多くは奇岩の山が多く、岩の白と緑のコントラストが美しく国家AAAAA(5A)級の観光地に指定され、「千山風景区」と呼ばれている。別名を「東北明珠」(東北地方の美しい真珠の意)とも呼ばれている。

私が大連勤務の時、「千山に登って来ましたが素晴らしい。総経理も一度登るといいですよ」と何人かの社員に言われたので、行くつもりにはなっていたがその機会がなく、10年後に実現することになったわけである。朝早く、中国人の友人が二人ホテルに来たのですぐタクシーに乗って大連北駅に向かった。この時間帯は流石に道は混まず6時半前には駅に到着した。まず鞍山駅までの切符を買ってもらう。片道129元である。7時17分発の高鉄なので構内

にあるケンタッキーに入り、私はコーヒーとハンバーガーを注文した。

以前ハルビンに行った時、定刻より5分早く高鉄が動き出した経験があるので定刻7～8分前に高鉄に乗り込んだ。今回は定刻通りに出発した。例によって時速300キロを超えるスピードでトウモロコシ畑の中を突っ走り、8時39分に大連から約300キロ離れた鞍山駅に到着した。近代的な大きな駅舎である。駅からはタクシーに乗り、途中今日宿泊するホテルに荷物をおいて、また千山に向



千山の最高地点「仙人台」。
奥の岩の中には観音様。

かった。千山は鞍山市の南東18キロメートルにある。

さて前号で「鞍山市」は日本人に比較的なじみのある街と書いたが、改めて鞍山市の歴史を見てみよう。一定年齢以上の方には懐かしい街と思う。

鞍山周辺は、古くから鉄の産出で知られ現在は中国では最大の製鉄所があり、「鋼都」の異名を頂いている。鞍山は市の南方に二つの山が重なり、これが

馬具の「鞍」に似ていることからその名が付いた。人口は約350万人で省都の瀋陽市、大連市に次いで三番目に大きな都市である。したがって車のナンバープレートは、「遼C-0000」となる。“遼”は遼寧省、“C”はアルファベットの序列3で、遼寧省第3番目の都会鞍山市という意味である。鞍山の製鉄の歴史は古く、前漢の武帝(B.C.156～B.C.87年)時代には鉄鉱石の採掘と製鉄を始めている。唐代に製鉄業が発達している。近年に到り1905年の日露戦争後、この地を支配した日本は南満州鉄道(満鉄)を設立した。この満鉄が鞍山付近で鉄鉱石の大鉱脈を掘り当て、近傍の撫順(遼寧省)で石炭が産出することにより、1918年に鞍山製鉄所を設立した。砂鉄くらいしか採れない日本はここで生産した鉄鋼をあらゆるインフラや兵器の生産に活用した。1945年の敗戦後、ソ連は製鉄所設備を運び去った。ソ連という国はさらにシベリアにかなりの日本兵を強制連行し極寒の地で何年もの間、強制労働させたが、とにかく略奪が得意の国である。1949年中華人民共和国になって、この地は鞍山鉄鋼公司として再建され新中国の最初の大型鉄鋼コンビナートに生まれ変わったのである。

タクシーは一路千山に向かって走っている。友人の話では今から行く登山口は、運転手の話で入場料が要らないということであったが、そこに到着すると係員から結局一人30元支払わされた。友人はここが仙人台に登る登山口だと説明してくれた。歩き始めると嬉しいことに〈柳絮〉が飛び始め、私たちを歓迎してくれるように感じた。天気は抜けるような青空で空気もおいしく感じる。初めのうちはよかったが、登山道はすべて石段で、二十数段登り切ったと思うとまたそこから二十数段くらいの石段が右に折れたり左に折れたりして現れるという繰り返しである。しかも周囲は同じような風景ばかりでさすがに徐々に足が重くなっていった。と言っても降りるわけにもいかずスポーツドリンクに助けられながら頂上を目指した。このルートはほとんど人と出会わず、本当にこの道でいいのであろうかという疑念がよぎる。その疑念を振り払いつつ一歩一歩登っていくと、ついに頭の上あたりで人の声が聞こえてき



「千山風景区」の入場門

た。足に力が加わり岩と岩の間の道を登りきると、10数人の人が休んでいてようやく頂上に着いたと分かった。頂上には〈仙人台〉と書かれた石碑があり、「千山第一高峰・海拔708.8米」と刻まれている。そのそばで若いカップルが自撮棒を前に突き出して何枚も記念撮影をしていた。

頂上は8畳一間くらいの広さがあり、奥の方は岩の洞窟がかぶさるよう存在を誇示している。前面には年寄り夫婦が毛氈をひろげ小物を売っていた。周囲は金属の柵が設置されているが、そこには赤い布がたくさん取り付けられている。そしてそこそこに中国の国旗がハタめいている。なにもこれほどの国旗を掲げなくてもよさそうなものを、と思う。エベレストの山頂なら分かるが……。洞窟の奥には「南無観世音菩薩」と書かれた観音様が祀られており、皆そこについて線香を求め三拝九拝している。708mの高さしかない頂上からの眺望は素晴らしい。周囲にこの山より高い山がないので当たり前といえばそれまでであるが、重畳たる998の峰が見渡せる観光地はそうはないのではあるまいか。名前の知らない花が咲き乱れ、まだ見たことはないが浄土(?)の雰囲気醸し出している。

我々はスマホにしっかり景色をおさめて山の反対側を下ることにした。お腹も少しすいてきたので絵葉書や観光案内に掲載されている大きな入場門(正門)に行きそこで昼食を摂ろうということになった。下りも石段が延々と続き、登りよりはマシであるが、最後には膝ががくがくしてきた。やはり登山道は土の道に限る。そして我々は写真で見たことのある巨大な入場門に到着した。

(続く)